

Guild edition

マンドリンオーケストラ・ギルドについて

20世紀ドイツで活躍した作曲家・研究家、コンラード・ヴェルキ (1904-1981) は、18世紀マンドリン音楽の再発見と、マンドリン史の編纂、そして当時斬新であった新古典派のスタイルによるマンドリンオリジナル作品の作曲など、後のドイツ・マンドリン音楽の方向を大きく左右するような重要な活動を行います。そのヴェルキが戦前に組織した合奏団は「ラウテンギルデ(リュート組合、またはリュート協会という意味)」と名付けられ、その後50年に渡ってマンドリン合奏の分野で重要な功績を残していきます。

マンドリンオーケストラ・ギルドは、このヴェルキとラウテンギルデの功績に敬意を払い、その名前の一部を使わせていただくこととし、2013年にマンドリニストである柴田高明を中心として結成されました。

アマチュア団体として音楽に真摯に取り組み、演奏会を通じて多くの方と音楽の喜びを共有すること、そしてこうした活動を通じて将来のマンドリン音楽に少しでも貢献できることが、私たちの願いです。

❖編曲について

ディヴェルティメント 変ロ長調 KV137(125b)

ヴォルフガング・アマデウス・モーツァルト (1756-1791) / 永田参男 編曲

ディヴェルティメント 変ロ長調(K. 137)は、モーツァルトが16歳の時に作曲したと云われている三つの弦楽四重奏のためのディヴェルティメントの第二曲目にあたる。

本編曲は、ベーレンライター版の弦楽四重奏を基にしている。

18世紀においてマンドリン属のトレモロ奏法は、装飾音の一種として用いられたことから、本編曲では当時の演奏スタイルにならない、トレモロ奏法を用いないで演奏する。

コントラバスパートは、チェロのパートをなぞらせる形をとり、

アーティキュレーションや音高は、限りなくオリジナルのそのままを踏襲している。

昨年、アイネ・クライネ・ナハトムジークの編曲を出版した時と同様に、今回もギターパートを加筆するにあたり、以下の点に気をつけながら編曲した。

- ・ギターパートが加筆されたことにより、必ずプラスの効果をもたらすこと
- ・原曲のイメージを損なわないこと
- ・音の数が無駄に多くなり過ぎないこと

モーツァルトの弦楽四重奏曲は、当然ながら作品として非の打ち所がないほどすでに完成されており、これにギターパートを付け足すということ自体が「余計」なことである。しかし、マンドリンオーケストラという編成で彼の素晴らしい曲に触れたいという純粋な思いは、実際の練習を積み重ねるにつれ、更に大きくなっていく。この「余計」な思いが、マンドリンオーケストラを楽しむ方々の中にも浸透していったら、こんなにも嬉しいことはない。(永田参男 記)